

悠久の青き氷河

——小さな失敗：2人前のステーキ——

しまった！ 2人前のステーキを持ってくるかもしれない。

ホテルの部屋から、ガスティノー海峡に入ってくる豪華客船をぼんやり眺めている時、ふと気がついた。

海峡に臨むウエストマーク・ジュノー・ホテルに着いたのは夕方。この日はさすがに疲れて、夕食はルームサービスを頼むことにした。

“Two bottles of Heineken, beef steak
and fried potato....”

「(ビールの) ハイネッケン2本、それにステーキとポテトを1人前」を頼んだつもりだったが、わたしのジャパニーズ・イングリッシュは単数と複数の使い分けがなっていない。ひょっとしたら、ステーキとポテトを2人前持ってくるかもしれない。そう気がついて電話をとり上げようとした途端、ドアをノックする音がして、愛想のよいボーイがニコニコして入ってきた。

“Good evening, Sir.”

危惧した通り、まさしく2人前のステーキとフライドポテトが目の前に運ばれてきた。ムムム……。

“Two bottles of Heineken, one beefsteak and one order of fried potatoes”などとはつきりいうべきだった。今更ながら、自分の語学力に臍を噬む思いだったが、遅すぎる。

1人前300グラムほどもある大きなステーキだが、こうなればやけ食いでもする他はない。

心中ガックリしながらも、表面だけはポーカーフェイスでとり繕い、ボーイに海峡を望む窓ぎわに食卓をセッティングするよう頼んだ。若いボーイは、まさかわたしが一人旅だとは夢にも思わないらしく、椅子を2個並べ、せつせと2人前の食事をとりわけののに忙しい。わたしも氣勢をそがれて自分一人で食べるとも言えず、チップを払って早々に退散してもらった。

まあいいか。旅をしていりゃあこんなこともある。

みずからを慰めながら、ようやく夕闇の帳が濃くなってきた海峡を眺めながら、わたしは2人前のステーキにとりかかった。

——アラスカへの誘い——

西部諸州司法長官会議で、日本の法制度について話してくれませんか？

駐日アラスカ州事務所の知人から話があったのは、1ヶ月ほど前だった。

ワシントン、モンタナ、アイダホ、ノースダコタ州など各地の司法長官が、今年はアラスカ州のジュノーで会議を行います。会議のアトラクションとして、ゲスト・スピーカーに話してもらう恒例になっていますが、今年は日本から法律家を呼ぼうという話になりました。ゲスト・スピーカーとして来てもらえませんか？

ちょっと前に腰痛をやったばかりだったのでわたしが渋っていると、知人はさかんにアラスカの大自然のすばらしさを褒めそやす。

アラスカはアメリカ最後のフロンティアで、東京とは全く違う別天地ですよ。鬱蒼とした森林、清冽な川の流れ、それに青く輝く大氷河とフィヨルドの絶壁。遊覧船で氷河の崩れ落ちる轟音を聞くほどエキサイティングなことはないですよ。アラスカの大自然を楽しむよいチャンスですから是非受けてください。

巧みな誘いに心を奪われ、わたしはスピーチを引き受ける破目になった。

その当時はまだあった東京からアンカレジ行きの直行便に乗り、さらに小型機に乗り継いで、わたしはやっとジュノーに着いた。アラスカの州都とはいえ、人口3万人にも満たないジュノーの空港は、どこか古里の田舎駅にも似て閑散としていた。タクシーがあるのかも分からないような、本当に小さな空港だった。

——初めての英語のスピーチ——

翌日の昼近く、指定された会場に行ってみると、予想していたのとは大違い。西部諸州の司法長官と関係者20人くらいのこじんまりした会議と思っていたのが、参加者は150人近くの大会議であった。正面には星条旗とアラスカ州旗、壁一面には各州の州旗が掲げられている。

こんな大人数では、参加者のほとんどは日本の法制度などに興味もないに違いない。今回はわたしにとって初めての英語の本格的スピーチ。1週間もかけて、アメリカ人スタッフと共にスピーチの原稿を仕上げたが、余りに専門的なトピックはこの場にふさわしくない。この場の雰囲気を見て、わたしは思い切って原稿から離れることにした。

冒頭にジョークを言って、会場の笑いをとればよいが、わたしの英語力ではとても無理な話。せめてアメリカと日本の法制度の違いをストレートにぶ

つけて、聴衆の興味を繋ぐ他はない。

日本とアメリカは、先進国の中では最も極端な法制度を持った国であります。あえていうと、「アメリカは訴訟を奨励する訴訟社会」であり、「日本は訴訟を抑圧する反訴訟社会」であります。

In Japan, we have no discovery, no
punitive damages, no jury...

アメリカ法のエッセンスともいうべき、証拠開示制、懲罰的損害賠償、陪審制度がないという話に、聴衆が驚いている雰囲気、ヒシヒシと伝わってくる。原稿を離れてのスピーチだが、何とかいけそう。

...and we have no ambulance chasers (日本では「救急車後追い弁護士」は いません)

ここでやっと聴衆の笑いがはじけた。ambulance chaserとは、救急車の後を追って事件の委任を受けようとする弁護士を皮肉った言葉である。米国ではそれほどに弁護士の数も多いし、訴訟も多い。

日本の企業を代理して言いがかり的な訴訟に巻き込まれた経験をベースにして、わたしはアメリカの「正義」と日本の「正義」の決定的な違いについて語った。アメリカの正義は白か黒かの2元論をとるが、日本では白と黒の間に正義を見出すこと。アメリカではたとえばPL訴訟で、被告会社を破産に追い込む判決も「正義」と考えられるが、日本ではそのような正義は好まれないこと……。

スピーチの後、いかにもアメリカらしく聴衆から次から次に質問が出される。早口の英語でまくしたてられるので、わたしは何回も聞き返し、汗だくになりながら、何とか2時間半の長丁場を切り抜けた。

——ポーター・氷河の青き輝き——

その夜わたしはアンカレジに泊まり、翌朝、アラスカ州政府の訴訟担当弁護士を表敬訪問した。たまたまわたしは、アラスカ州政府から日本でのデポジション（証拠録取）の準備を頼まれていたので、その打ち合わせもかねていた。

スタッフの1人のジェームスが何かとわたしに話しかけてきた。ジェームス

は、モルモン教徒で、若い時に日本に派遣されたため、日本が懐かしいという。わたしが「アラスカの大自然を見たい」というと、気のいいジェームスは午後休みをとってわたしをポーテージ氷河に連れて行ってくれた。

ポーテージ氷河はアンカレジから南東へ約80キロ、チュガッチ国立公園の中にある。

氷河へ向かう道路沿いには、白い雪を頂いた山並が連なり、アスペンやスプリースの針葉樹林が広がる。

黄色のアメリカ水芭蕉、可憐な白のアラスカ・コットン、アラスカ州花の清楚なフォアゲット・ミー・ノット（忘れな草）がアラスカの山野を彩っている。花々は短いアラスカの夏を色彩で飾っている。

ポーテージ氷河は深いコバルト・ブルーに輝いていた。

長さ10.4キロ、幅1.6キロにも及ぶ大氷河である。

しわくちなな銀紙のような氷塊は、日の光を浴びてキラキラと燦らめき、グレーシャー・ブルーと呼ばれる独特な青い光を放っている。

それにしてもなぜこんな青みがかった色になるんだろう？

わたしが問いかける。

氷の結晶にクラックや空気の泡が発生し、ブルー以外の可視光線をほとんど吸収してしまうんです。

ジェームスが答える。

ビタス・ベーリングがピョートル大帝の命を受け、1728年にアラスカを発見するまで、この極北の地は無人地帯だった。この大氷河は人の営みに関係なく堆積を続け、長い時を生きてきたに違いない。悠久の大氷河と対峙すれば、世俗の栄誉も色あせてくる。人々の喝采も虚しい。

我は何処より来て、何処へ行くかも知らず。

一瞬わたしは、思索に明け暮れた青年時代に還った。